

餅は餅屋

松村真宏 大阪大学大学院経済学研究科



大阪大学大学院経済学研究科に着任して今年で6年目になる。未だに経済学研究科における研究や教育方針について試行錯誤の日々が続いているが、ようやくその手がかりがつかめてきた。

僕は学生・ポストク時代は人工知能分野を主戦場とし、主にデータマイニングやテキストマイニングの研究に取り組んでいた。着任した当初はマル経と近経の違いも分からないほど経済学については素人であり¹、経済学研究科でどのような研究や教育が期待されているのか見当も付かなかった。また、理系から文系に来たので文化の違いに戸惑うことも多く、経済学部の学生たちの

- ✓ プログラミングはしない(そもそも選択肢にない)
- ✓ 学部3年生からゼミに配属し4年生で卒業する
- ✓ 大学院に進学する学生は少数で研究者志望は稀

といった点は理系の学生たちと特に異なっている。大阪大学経済学部においては卒論は必須ではなく、そもそもゼミの単位も必修ではない²。研究のスタイルについては、理系だと研究室内に学生の席があって、毎日顔を付き合わせているうちに先輩から後輩へ自然と知識やスキルが伝承されていくが、文系のゼミでは週1回のゼミのときに顔を合わすとき以外は各自が好きな所で過ごすので、研究は基本的に1人で進めていくことになる。

研究のアプローチについても、理系だと従来手法よりも優れた手法やアルゴリズムの提案が中心となるが、文系の場合だと分析手法に新規性は求めずに伝統的な分析手法を用い、その代わりに分析の切り口に新規性を求めるアプローチとなる。分析の切り口は、分析のときに仮定するモデルとほぼ同義であり、モデルに新しい仮説を組み込んで検証することが研究対象となる。

このように、理系と文系では状況が大きく異なるので、ゼミでの研究は教育の一環としての研究実習のような側面が強くなる。卒論が卒業要件ではないので、研究の決定権は学生にあり、学生が興味をもって自主的に取り組めるような課題を見つけることが重要になってくる。

したがって、研究方法と研究課題の両方についてこれまでの研究のスタイルを変える必要があるが、よく考えてみると自分の専門と経済学研究科との接点が見えてきた。データから統計的なパターンを発見するデータマイニングは、モデルや仮説を導くときに使えるので、これまでの自分の研究が生かせるのである。

経済学部の学生にデータマイニングに興味をもってもらうことについては、近年ベストセラーになったスティーヴン・D・レヴィットとスティーヴン・J・ダブナーによる「ヤバイ経済学」が非常に参考になる。本書では、学校の先生や相撲力士の不正行為、不動産広告の文言と価格の関係、赤ん坊の名付けの傾向、犯罪者が減少した理由、ヤクの売人が裕福でない理由などの非常にユニークな問題を、データマイニングや統計解析の手法を駆使して明らかにしている。これまでは接点がないと思われていた経済学とデータマイニングの関係は今ではホットなトピックとして認識され始めているのだ。

データマイニングは1990年代に生まれた新しい研究分野なので、経済学部で教鞭を執られている先生方の中でデータマイニングを専門にされている方は少ない。そのような背景からデータマイニングは今はまだ経済学分野ではあまり浸透していないが、今後活用されていくことが期待される。また、様々な報告書やアンケートの自由回答文などのテキストデータについても、そこから課題や問題点を洗い出すための手法としてテキストマイニングへの期待も同様に大きくなっている。

僕は着任してすぐに、大学院向けに「データマイニング論」「知識・情報マネジメント論」の講義を立ち上げてデータマイニングやテキストマイニングの教育を進めてきたが、学部でも開講したほうがよいと考え、来年度からは、学部3年生向けに「データマイニング」「テキストマイニング」、学部2年生向けに「データマイニングによるヤバイ経済学」を開講することにした。調べたわけではないが、経済学部でデータマイニングとテキストマイニングの両方をカリキュラムに組み込んだ大学は珍しいのではないかと思う。

しょせん餅は餅屋である。経済学を専門とする先生方は周りにたくさんいらっしゃるので、その方面は諸先生方にお任せするのが一番である。僕が提供できることはデータマイニングとテキストマイニングについての専門知識と経験である。経済学部におけるデータマイニングとテキストマイニングの教育と研究の必要性を確信できたことはこの5年間の大きな成果である。今年1年で達成できることではないが、大阪大学大学院経済学研究科といえばデータマイニングに強いと言われるようにがんばっていくことが今年の抱負である。

¹ 実は今でも分からない。

² 必修になる動きはある。